

手紙でたどる

明治時代の移民生活

― 甚四郎と、妻お峯のその後 ―

本展示では、パネル展示で取り上げている岩崎甚四郎（紀三井寺村出身）関係の資料の実物を展示します。今回は、家族を日本に残して渡米した甚四郎と家族のその後が分かる二つの資料を取り上げます。

上段の資料は、甚四郎が渡米してから一年後の明治二

十六年（一八九三）九月、紀三井寺村の義弟で本家を継いでいる岩崎富二郎に宛てた手紙です。

時候の挨拶のあと、「お峯のことは言葉が出ない。私のような不幸せな者は世にいるだろうかと悲しくて、毎日人のいない所で泣いている。残された子供たちはさぞ不自由だと思うと夜も寝られない。こんなに辛いことは世にあるものかと我が身を恨む」と悲痛な思いが書かれ「お峯を殺したのだと思って生きた心地がしない」とあります。

同年七月、妻のお峯が四一歳の若さで死去してしまいました。この手紙はその悲報に対する甚四郎の返事です。

続いて「子供のことを思い、歯を食いしばり気を取り

直し、今帰国しては金も無いので二年は辛抱しようと思
うが、子供の都合によっては道中の金ができれば帰国す
る。この手紙が到着したら子供のことを聞かせてほしい
と記します。また、富三郎の母に子供の面倒を見てもら
うこと、甚四郎長女のお安に、弟妹を大事にするよう言
い聞かせてほしい、と頼みます。

ほかに、お峯の法事は質素にせず十分に行うこと、墓
石は富三郎の父と同じようにして、自分とお峯二人の戒
名を刻むことをお願いしました。

ちょうどこのとき、甚四郎は別の仕事を求めてサクラ
メントへ移り働いていました。お峯の死後、子供たちは
本家が世話をし、甚四郎はアメリカで金を稼いで仕送り

を続けています。

お峯死去から約三年後の明治二十九年（一八九六）五月、在米の寺下安吉（紀三井寺村出身）から富三郎にあ
る手紙が届きます。下段の資料がその手紙で、甚四郎の
死去を知らせるものでした。

甚四郎は、同年一月頃から病気になり三月二十六日に
死去し、二十八日に葬式が行われました。安吉はお悔や
みを述べて、死去前後のことに触れます。

甚四郎は、前年の八月頃、バカビルで金を儲けて飯屋
を始めたものの、二、三ヶ月でその金を失います。甚四
郎が飯屋を開業するに際しては、開業を思いとどまるよ

う現地の紀三井寺村出身の人たちが何度も止めましたが、甚四郎は聞き入れる様子がなく、やがて金もなくなり病気になったという事です。果ては借家の家賃が払えなくなっただため、家主には荷物と旅券を取られてしまいました。甚四郎死去後も、旅券だけは必要だが金を払わなければ返してくれないという事で、安吉も心配します。

続けて葬式の諸費用合計とその内訳が記されます。費用は安吉と南定吉(紀三井寺村出身)が立て替えたこと、その金額分を紀三井寺村の安吉と定吉の親に払ってほしいこと、中原豊楠が帰国したので確認してほしいことを伝えて、手紙は終わります。

甚四郎の葬式に関する手紙はほかにも残っており、おもに紀三井寺村出身の移民が協力して葬式を執り行ったこと、葬式の様子を撮影したことなどが記されています。

なお、甚四郎とお峯の子供たちのその後について、長男敏郎は大阪や奈良で働き、紀三井寺村に住む三男定四郎は、叔父富三郎が保証人となって学校に通っていることが確認できます。ほかの姉弟たちも、敏郎との手紙のやり取りが確認できることから健在であることがうかがえ、甚四郎がお願いした通り、本家が面倒を見続けていたと思われれます。

展示に関する内容は、『和歌山県立文書館だより』六一号
でもふねていませう。ぜひご覧くだせう。

